

# 石積みみの技も習得する！

誰でもできる石垣修復・基礎講座

文・写真・イラスト〓真田純子（東京工業大学大学院准教授）



## 中

山間地域に多く見られる棚田や段畑。

伝統的なつくり方には大きく分けて2種類あります。土坡どはと呼ばれる土の土手と、石でつくる石積みです。農地の石積みによく見られるのは、コンクリートやモルタルを使わない「空石積み」と呼ばれるものです。

石を積む技術は昔は農業技術のひとつで、地域ごとに継承されてきましたが、コンクリートの普及や兼業農家が増えて手が回らなくなったためか、最近は若い人にはあまり継承されていません。崩れたところからコンクリートに代わっていく、という状況が生まれています。

**その土地の石で積む、崩した石を再利用する**

空石積みからいしづみの技術が継承されないという状況は、じつはヨーロッパでも起こっていました。しかし近年、若い人たちが高齢になった技術



さなだ・じゅんこ

東京工業大学大学院・環境・社会理工学院准教授。1974年、広島県生まれ。専門は景観工学、緑地計画史など。2007年に徳島大学に助教として赴任したことをきっかけに、一次産業のつくる風景を継承していくため地場産業の活性化や、石積み技術の継承などの活動に取り組む。2015年より現職。



徳島県三好市の高開（たかがい）集落の石積み

者から学び、風景や文化を受け継ぐ動きが出てきています。空石積みにもともとその土地から出てくる石が使われていて、積み直す際にもその石を再利用できる点など、地域資源を循環させる持続可能な工法として環境的な観点からも見直されてきています。

石積みのある棚田や段畑の風景は、これからの地域活性化を考えると、重要な資源になるでしょう。農家レストランや農家民宿をしようという場合にも、そこから見える風景が美しいというのは重要な要素です。また近年は、農作物に社会的環境的な価値を求める人たちも増えています。たとえば棚田でつく

られたこと自体が付加価値になるということです。ヨーロッパで空石積みが見直されているのは、じつはこれも背景にあります。原産地呼称制度が浸透し、食と文化、土地を強く結びつけるような考え方が広まり、いい風景の場所で作られたことが農作物の価値にも反映されるようになりつつあるのです。

日本の中山間地域の活性化にも、風景を資源にして交流人口を増やすだけでなく、本丸である農業の活性化が欠かせません。生産性向上に活路を見いだすのが難しい棚田や段畑では、石積みが環境に負荷をかけないことなど、伝統や文化、環境などを農作物の付加価値にすることが重要でしょう。

石積みの農地を持っている人にとっても、空石積みも、同じように空石積みで直せば、材料代はほとんどいりません。必要なのはマンパワーと少しの技術だけ。安く直せるというのも、じつは石積みの利点です。

**気軽に学べる「石積み学校」も開催**

私は2007年に徳島で石積みの風景に出会い、2009年から石積みを習い始めました。空石積みの直し方がわからなくて困っている人がたくさんいることを知り、2013年に一般の人が気軽に空石積みを学べる「石積み学校」を立ち上げました。興味があるからという理由で参加する人もたくさんいますが、自分の家の石積みを直したくてという切実な理由で習いにいらっしゃる方も半分くらいいます。